

富士川水系の関係資料

- ・ 富士川の土砂管理について

平成 14 年 11 月 15 日

国土交通省河川局

富士川の土砂管理について

1. 現状の分析

- 河川については昭和41年以降現在までの河道の変動状況を見ると、平均河床高は、最大2 m、平均で1 m程度低下している。また、ボリュームでは6,000万m³減少している。
昭和40～50年代では減少傾向が著しかったが、昭和61年以降近年は変動量は小さい。
また、昭和57年8月洪水に代表されるように、洪水時の河川への土砂流出は著しい。
なお、経年的には低下傾向にあるが、河川管理上問題は生じていない。
- 海岸について、富士海岸（富士川左岸側）においては、田子の浦港東側の侵食が著しい。また、蒲原海岸（富士川右岸側）については、現在も侵食傾向となっている。
- 砂防領域については、昭和41年以降現在まで、砂防堰堤を釜無川上流域で59基、早川上流域で74基の事業を整備している。なお、現在までの堆砂量は発電ダム等も含め釜無川上流域で約500万m³、早川上流域で約1,900万m³となっている。
- 河川における砂利採取については、昭和40年代には年間約240万m³もの採取があったものの、近年では年間70～90万m³と採取量が減少している。
- 海岸侵食対策として、近年、大沢崩れによる発生土砂、工事現場からの発生残土を活用した養浜事業を実施している。

2. 今後の方針

土砂堆積が著しい区間を中心とした砂利採取等により、河床の維持を行いつつ、河積不足の箇所での河積拡大を徐々に実施し、海岸への土砂供給の確保に努める。

砂防領域では、土砂災害を防止しながら、平常時の安定した土砂供給を考慮した事業を実施。（オープンタイプの砂防ダムの設置や既設砂防ダムのスリット化等）

海岸では、侵食対策として離岸堤、養浜等海岸保全対策を引き続き実施。

富士川流域全体の土砂動態のメカニズムを把握するため、引き続き関係機関と連携してモニタリング調査を実施。

例えば、洪水時の急激な土砂動態、長期的な土砂収支等、水系全体での土砂動態のメカニズムの解明を行っていく必要がある。

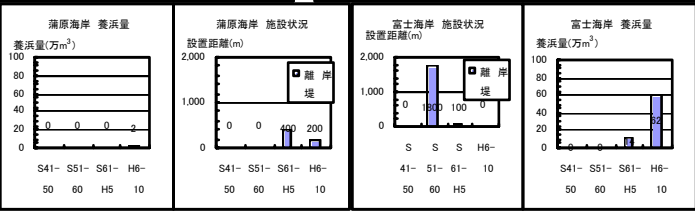
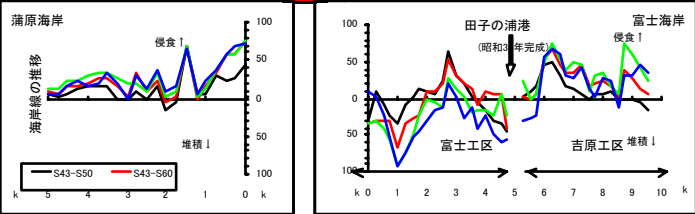
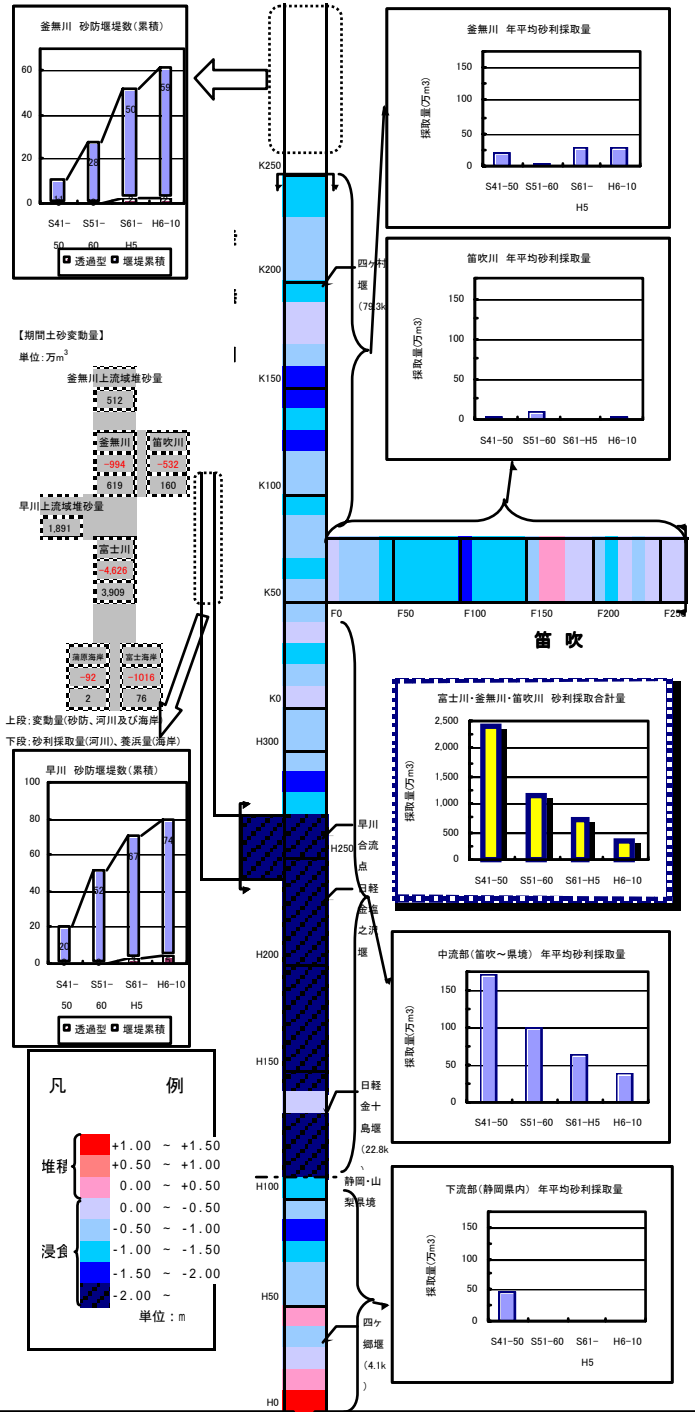
砂防では、土砂生産量と砂防領域からの移動量を把握

河川では、洪水時の急激な河床の変化や、経年的な変動を把握

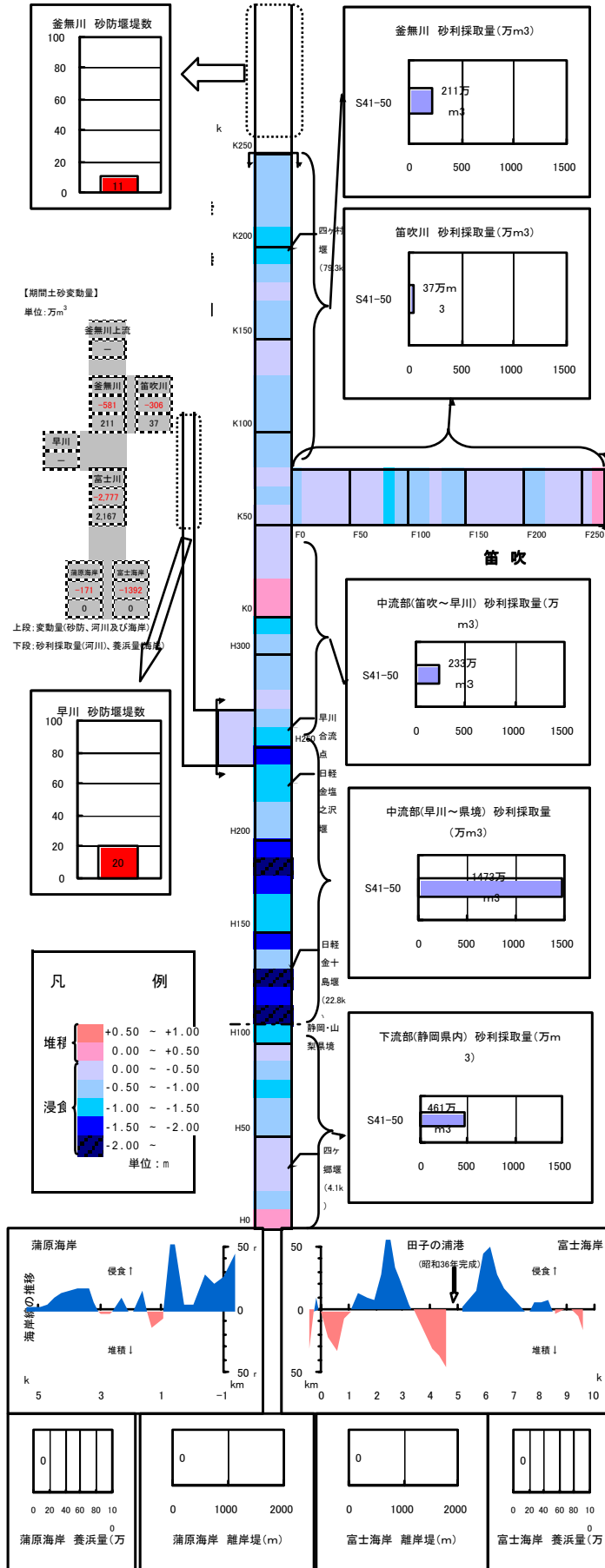
海岸では、汀線の変化や海岸の安定に必要な河川からの供給土砂量等を把握

なお、計画高水流量を流しうる河積を確保するためには、更なる掘削が必要である（約2,700万m³）。

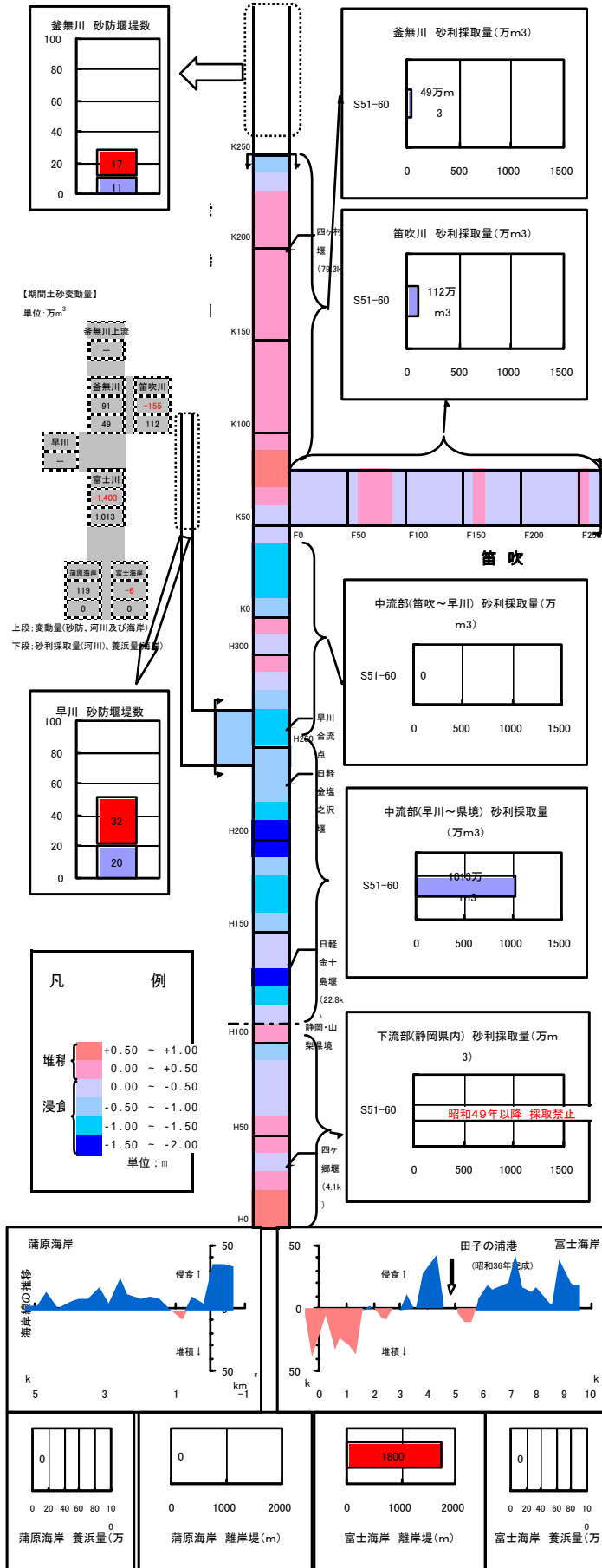
S41以降H10までの土砂動態



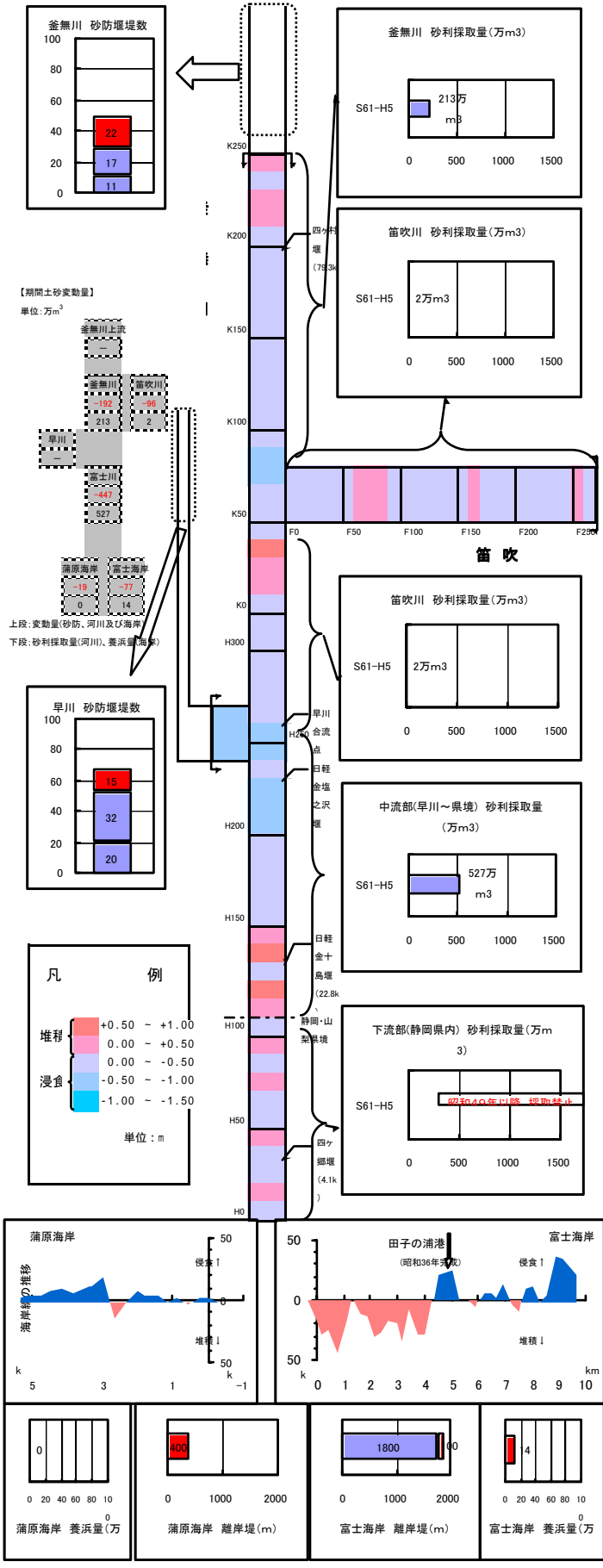
S41~S50における土砂動態



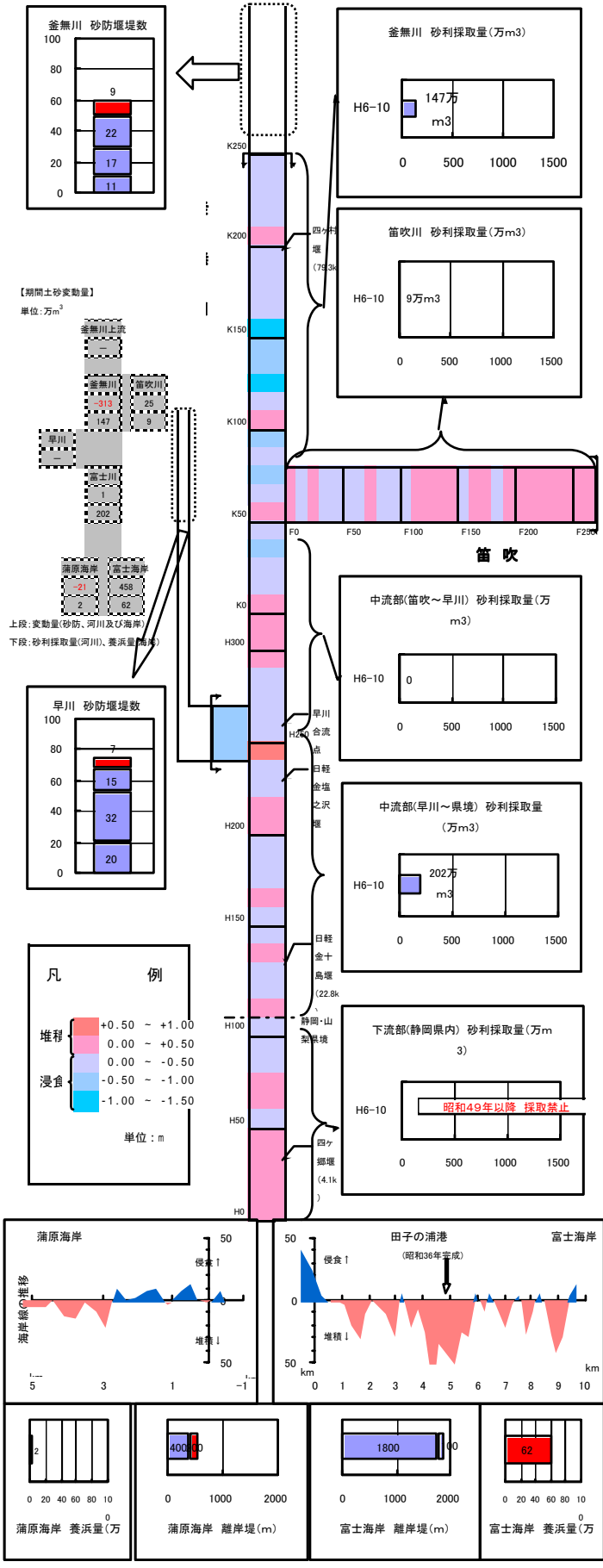
S51~S60における土砂動態



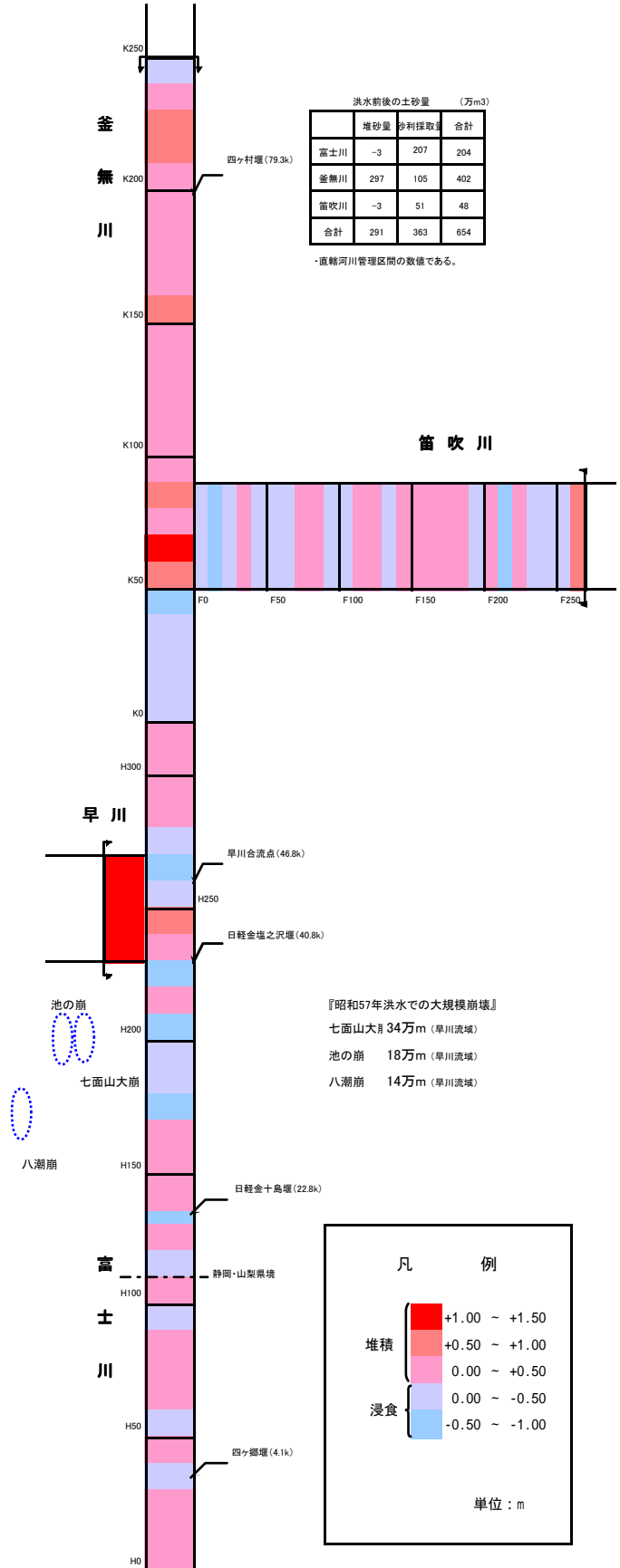
S61~H5における土砂動態



H6~H10における土砂動態



洪水前後の河床の変化(昭和57年8月洪水)



(洪水前: 昭和57年12月~昭和58年1月測量)
 (洪水前: 昭和55年11月~昭和56年2月測量)

現在の砂利採取箇所

基本事項：現況の河積から計画高水流量を流下させるのに必要な掘削箇所であること

